

土木遺産ツーリズムに関する基礎的研究

原口 征人¹・岩田 圭佑²・今 尚之³・石川 成昭⁴

¹正会員 (一社)北海道開発技術センター 主任研究員 企画部 (〒001-0011 札幌市北区北11条西2-2-17)
E-mail: haraguchi@decnet.or.jp

²正会員 (国研)土木研究所寒地土木研究所 (〒062-8602 札幌市豊平区平岸1条3丁目1-34)
E-mail: iwata-k@ceri.go.jp

³正会員 北海道教育大学 准教授 教育学部 札幌校 (〒002-8501 札幌市北区あいの里5条3丁目)
E-mail: nowkon@mail.momonga.gr.jp

⁴日本データサービス(株) 課長 水工第I部 (〒065-0019 札幌市東区北16条東19丁目1-14)
E-mail: s-ishikawa@ndsinc.co.jp

土木遺産に関わる観光活動や研究について「土木遺産ツーリズム」と呼称した場合に、そのツーリズムではどのような視点を持って、何を論ずればよいのかについて本稿では考察した。筆者らは平成20年度より土木学会北海道支部の年間行事の一つとして選奨土木遺産を対象とする土木遺産ツアーを実施してきた。それらバスツアーの形態であり、これまでの土木史研究に逐次、報告している。本稿では、それらの考察を踏まえて土木遺産ツアーの特質についてまとめる。次に、ヘリテージツーリズムの既存研究からの考察により、土木遺産ツーリズムの基本軸として「土木コミュニケーション」「地域活性化への貢献」「フィールドのストーリーづくり」の3つを提唱した。後半は平成27年度ツアーの仕込みについて報告し、今後の土木遺産のツアー化の一助とする。

Key Words : civil engineering heritage , tourism, sightseeing tour

1. はじめに

土木遺産（もしくは土木施設）を見て学ぶ観光が注目されてきている。ここで仮に、その土木遺産に絡む観光活動・考究を取り出して「土木遺産ツーリズム」と呼称し議論し始めるとしたら、では、そのツーリズムとはいったいどのような特質をもち、何を論ずればよいのだろう。そのことを本稿では考えたいと思う。

筆者らは平成20年度より土木学会北海道支部の年間行事の一つとして選奨土木遺産を対象とする土木遺産ツアーを実施してきた。それらは全てバスツアーの形態ではあるが、土木業界内を出て、観光業態の市場の中で自立させることを目指してきた。北海道の特殊性（札幌に多く消費者を抱えつつも、全北海道エリアに興味・関心を持てただけ）に助けられたこれらの土木遺産ツアーは今日まで続いており、これらは観光と土木史が協力したひとつの軌跡を描いている。前半でそれらを紹介しつつ、上記の問いに筆者なりの視点を作りたい。後半は平成27年度ツアーの仕込みとその結果を報告して今後の土木遺産のツアー化の一助とし、土木史の社会貢献・地域貢献のご参考になればと考える。

2. これまでのツアー企画の考察

(1) 平成20年から平成26年の北海道での企画

筆者らのこれまでの企画について概観しつつ土木遺産ツアーの特質について述べる。

a) 第1回土木学会北海道支部土木遺産見学会(H20.6)

前年度に支部幹事会（北海道電力関係者が幹事長）から北海道支部選奨土木遺産委員会へ、土木遺産ツアーのアイディアを持ちかけられた。この実現に1年を費やし土木遺産が多く選奨されている函館にて開催、札幌からの移動で半日を要することから2日間のツアーとなった。函館からの参加者も募集し、事前に地元の新聞報道があったため一般参加者が2名ほどあったが、ほとんどが土木学会会員であった。

効果として、土木施設という身近なものに感動できることに気づかされた、遺産＋ストーリーが加わることで感動、見学を受け入れる管理者（ガイド役）にも誇りを刺激される好影響、等が分かったが、実施面に対して一般参加者を増やしたいとの反省点が出た。

b) 石狩川と流水の科学者 岡崎文吉の足跡をたどる旅(H21.10)²⁾

初の観光バスツアー会社との企画で一般市民への広報がなされたがテーマが専門的で伝わらなかった、また料金が安い（3,980円）ため集客できず、ほとんどが土木関係者だった。催行実施される40名を確保するには、技術者向けにCPDとの連携が功を奏することが分かった。また巡る遺産の繋ぎ合わせ方として一定の範囲でのエコミュージアム的なくくり方を提示し、細かな残存遺構を結んでひとつのストーリーを組める可能性を導いた。



図-1 石狩川ツアーで取り入れた遺産の配置

c) 水道と電気を生み出す施設巡り (H22～24)

水の活用をテーマに札幌近郊の豊平川を利用した水道・発電施設（近代の水利用）と最新の水力発電所（揚水・地下発電所）の工事見学と併せて実施することとした。現在の工事現場を入れることで土工協（現、日建連）が進める現場見学のバス代補助事業（100万人の現場見学）に入れさせていただき、価格帯を下げて実施できた。これにより集客が果たせ、年2回の開催となった。また以降の2年間で1回づつ開催できた。

d) 北海道の東西を結ぶ峠の物語 (H23.7)

この年の秋に帯広までの全線開通を迎えた道東自動車道（高規格幹線道路）と狩勝峠の鉄道遺産という新旧両峠越え施設を訪れて、土木技術の今昔を体感するツアーとした。バス会社主体で宣伝したが順調に集客できて、これまでの企画で固定客がついてきているのを実感した。鉄道の廃線跡と高速道路工事（長大トンネル等）の対比では、さまざまな気づきが生まれていることが読み取れた。下記の3点にまとめている。

- ①土木の永続性：過去から現在にまで脈々と引き継がれてきた土木の営みが分かる。
- ②技術の継承：過去の素晴らしい仕事を見て、現在の仕事にも同じ技術が受け継がれていることを実感。
- ③現在が過去と重なる視点：現在の工事で出来たものも

将来遺産となるためには、今の仕事をおろそかにしてはならない、という視点。

e) 自然エネルギー/水力とメガソーラーを訪ねて (H24.7)

水力発電所と近隣の太陽光発電所を併せたエネルギーの今後を見据えたツアーであり、土木遺産がこれまで北海道の産業に果たしてきた役割を伝えた。

f) 港まち小樽のインフラ100年の物語 (H25～26)

小樽市にある4つの選奨遺産と重要文化財の機関庫、現在の高速道路工事現場を巡ることで小樽のまちづくり（都市インフラの形成史）を学ぶツアーとした。観光地でもあるので数多くの切り口があると考え、土木施設だけで構成した場合にどうなるかを実験したものである。2年間、同じ設定で開催するが2年目の集客は悪くなった。他の観光要素（運河や建築遺産等）との連携、また逆に土木遺産を他の観光要素に絡めることが有効でありそれらのバリエーションを提示することが課題といえる。以下、見出した点を記す。

- ・ツアー最後、水の恵みとして訪れた酒蔵にて土産物の購入がすごくあり、土木のストーリーで地域貢献ができる可能性を感じた。
- ・防波堤など地味な遺産でも事前のレクチャー（資料館訪問）があれば最大の感動を得られることを再確認（ガイドの重要性）。
- ・説明役の遺産管理者に都市システム全体からの視点が不足しがちなことが分かり、この部分には土木史が貢献できる（他との絡みや都市形成史上でのポイントを指南する）。

(2) 土木遺産バスツアーの特質

以上のこれまでの企画実施で分かった点を踏まえ、土木遺産ツアーが持つ特質、意義や役割について以下のように4点を指摘する。

a) 広域的な視点で現地を見る機会の提供

これまで、土木遺産の魅力発信を目的として、土木学会においても「HANDS+EYES」などの展示会を行ってきた。一方、土木遺産の多くは広域的に分散しており、実際に現場見学に行きたくとも、日常的には見学を行いづらい。そのうえ、中にはアプローチしづらい危険な場所に立地する土木遺産もあることから、実物に接することができる機会は決して多くない。

土木遺産バスツアーの魅力は、このような土木遺産のスケール感や日常目にすることが難しい場所からの見学も含め、広域に分散する土木遺産をバスで巡り、技術的創意工夫を目で見て楽しむ点にある。

b) 土木遺産に関する専門的な解説

選奨土木遺産認定制度の目的の一つが、歴史的土木構造物の保全であるように、土木遺産の保全は永遠のテー

マである。土木遺産の保全には、土木遺産が地域に果たした歴史的役割の認識が第一歩である。必ずしも観光対象となりづらい土木遺産に目を向けてもらうには、何らかの説明や体験といったプロセスが必要である。

土木遺産バスツアーでは、土木遺産が地域に果たした役割のスケール感や、当時の技術者がどのような創意工夫をしたのかを、土木史的な学術的知見も交えつつ紹介する解説を行っている。これは、主な参加者である一般市民への意識啓発のみならず、技術者への教育としても貢献出来ると考える。そのような意味では、維持管理に向けた課題や必要な技術開発について触れる事も土木遺産バスツアーの役割であり、そのような学術的・技術的な知見も増やしていく必要がある。

c) 地域の文化財としての土木遺産の利活用促進

土木遺産を保全、つまり維持管理していく上では、特に土木遺産の管理者や地域の協力が不可欠である。近年、観光や地域づくりの様々な場面において、土木遺産にも目が向けられている。来訪者がツーリズム的に土木遺産を「知る」「体験する」「語る」ことを楽しみながら、地域の成り立ちを学ぶ場として活用されている。このような、土木遺産に対する新しい“文化財としてのニーズ”を深め、土木遺産の管理者や地域とともに利活用の促進につなげていく必要がある。

d) 物語化

土木遺産を利活用していくには、土木遺産の歴史的な知見だけではなく、それらを地域の“文化財”として将来的にどう価値を見だし利活用していくかの議論も深める必要がある。重要なのは個々の土木遺産を単体で扱うだけではなく、広域的な地域の中で土木遺産の役割をストーリー化することであり、土木遺産バスツアーはそのストーリーを書物の上だけでなく実体として体験できる機会を提供する。

3. 先行研究を用いた考察

土木遺産ツアーは、世界遺産やヘリテージツーリズムなど文化遺産と観光の間で生じる問題を扱う学術分野、およびエコツーリズムなどに近いといえる。そこで、この分野の先行研究について考察し、土木遺産ツーリズムの考え方を筆者なりにまとめた。

まず文化遺産マネジメントとツーリズム開発を専門とする西山徳明氏（北海道大学観光学高等研究センター長）らの一連の研究が代表といえるが西山は“ツーリズムは異文化交流”との基本姿勢を示し次のように述べている⁷⁾。「ヘリテージツーリズムは、遺産を媒介として現代まで継承されてきた「モノ」と「コト」との関係性を、ホスト（＝ローカルコミュニティ）とゲスト（＝ツーリスト）がともに再確認し合うことで異文化の交流を

促進する機会」である、とする。これを土木遺産に置き換えれば、土木と一般市民との間の異文化交流であると捉えられる。これは土木の側から見れば土木広報の問題であり、市民の社会学習の場では土木工学を社会学習（や科学学習）にどう位置づけるかの問題になる。これら双方への影響が土木遺産ツアーでは起こることが確認されている。これらはひっくるめて土木コミュニケーションの視点といえる。ここでは特に、土木工学をインタープリテーション²⁾する（土木遺産を活用して土木技術を伝える）ことが課題になるといえる。

さて、こうした文化遺産とツーリズムの研究者が、社会学的な諸相でもって観光ツアーを探究するのは、これら文化遺産を用いた観光行動が地域に与える影響、特に地方のコミュニティ形成、地域文化（の保全）に与える影響や経済的な貢献（地域活性化）を考えるためである。同じく土木遺産でも地域の管理者への動機付けや地域との協力、語り部の問題など文化財としての地域での利活用（まちづくり）が関わってくる。これらにはツアーが持続していけるか、マネジメントやマーケティングの問題も絡んでくる。これら経済的な面も含めて土木遺産の地域活性化への貢献の視点とまとめられる。

そして土木遺産をツアーとして巡ることによって生まれる特質として重要なのが、単体ではなく群としての遺産の意義付け、広域でのつながりやストーリー（物語化）が形成される部分である。石狩川のツアーで示されるような、細かな遺産のつながりとその物語化、意義付けは地域開発のストーリーを実際に体験しながらなぞる、説得力のあるアトラクションを提供する。これは自然地形をうまく利用した（または対抗する）土木技術ならではの創意工夫が示される場であり、一連の連なりによって理解されるため、フィールドのストーリーづくりといえるものかと思う。環境の分野での「エコ・ミュージアム」がその概念としては近いと考える。

以上の視点を、エコツーリズムの概念説明³⁾を参考に示したのが下図である。

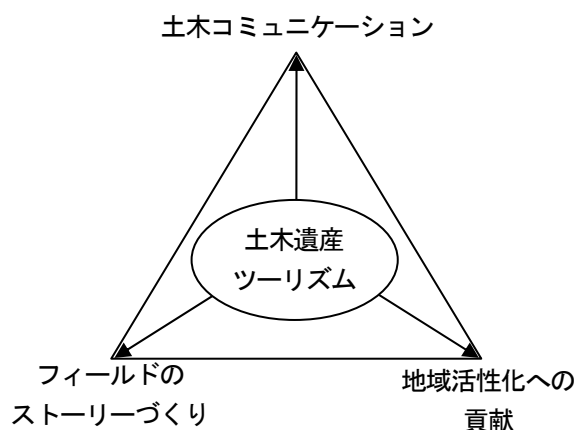


図2 土木遺産ツーリズムの3つの視点の軸

表-1 平成27年度ツアーでの土木遺産一覧

選奨年	竣工年	遺産名	場所	選奨理由
H22	1936	舞鶴橋	長沼町	千歳川流域の治水と開発を象徴し田園風景に映える円形アーチが地元で愛され移設保存となった戦前の希少なランガーガーダー橋である。
H23	1936	岡山橋	岩見沢市	道内に現存する数少ない戦前の鋼道路橋(4橋)の1つであり、北海道で最初に架設されたソリッドリブ・タイドアーチ橋である。
H24	1936	夕張川新水路	南幌町ほか	石狩低平湿地を蛇行していた夕張川を直接石狩川へ合流させ、水害常襲地帯を穀倉地帯へ変貌させる礎となったショートカットです。
H25	1920	旧北炭幾春別炭鉱・錦坑の炭鉱施設群	三笠市	旧北炭幾春別炭鉱・錦坑の炭鉱施設群は、北海道内現存最古の立坑櫓を含む立坑や坑口等、北海道開拓の原点である石炭産業を土木技術が支えたことを示す貴重な遺構群であります。

4. H27年度の事例

前章での整理を踏まえて、平成27年度のツアーの企画について説明する。

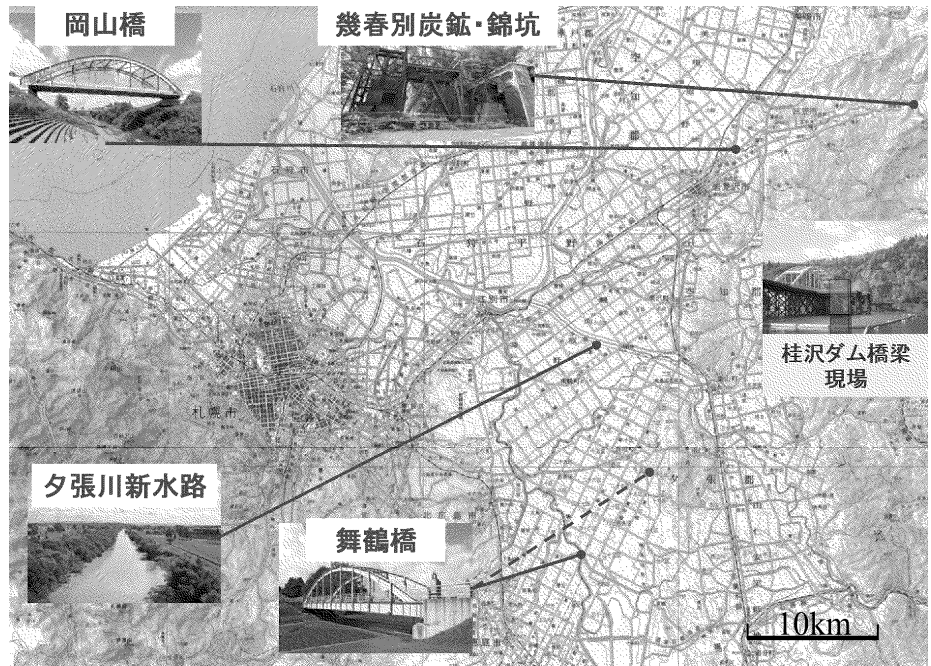
これまで選奨を受けたもので空知地方に関わるものは全4件ある(表-1)が比較的最近に選ばれたものこれまであまり知られていない遺産である。

しかし、次の竣工年を見ると分かることだが錦坑を除く3つは同じである。これは非常に重要なことを示していて、3つは北海道の歴史上、とても密接な関係を持っていて、企画立案で重要な「地域のストーリー」が成り立っている。

ストーリーのひとつは治水である。石狩川に流入する河川で千歳川・夕張川等は地形上、洪水を起こしやすく(増水時に石狩川へ流入できない)、その平野部は常に水が抜けずに湿地の状態であった。ここを農地とするために両河川の治水事業が実施され(「夕張川新水路」)、新水路に新たな橋(千歳川で「舞鶴橋」)が架けられたのである。そして2つ目のつながりとして陸軍特別大演習(1936年(昭和11))がある。ソビエト連邦を想定した演習では空知地方が演習区域となり、軍隊輸送上のネック解消として、木橋を架け替えて永久橋化する事業が急ピッチで成立した(「舞鶴橋」「岡山橋」)。

この治水でのストーリーにより現在の建設現場について桂沢ダムの堤体かさ上げ工事に伴う橋梁新設工事(下部)を見学に組み入れた。この現場についても過去の桂沢ダム建設(昭和30年代)が錦坑の廃坑の理由のひとつであること、ダムの工事が治水機能の増加を兼ねるものである点など、全体のストーリーと密接に関係している。

行程の概略を述べると、札幌を出てから恵庭へまずに向かい、そこから長沼町へと向かう経路をとることで移設された舞鶴橋が以前あった場所を通過してから舞鶴橋を見学する。次に排水運河を車窓から見ながら湿地の状



況を想像しつつ夕張川新水路へ行き、河川公園にある担当技術者の像を見学して昼食へ。午後、は橋梁新設工事を見学したのちに三笠の炭鉱遺産、最後に岩見沢で岡山橋を見学し道の駅で買い物をしてから帰途に着く、との盛りだくさんの内容となった。

5. おわりに

本稿ではこれまでの土木遺産ツアーについてツーリズムとして探求する視点について述べた。この視点によるH27ツアーの分析、評価等は発表時に示す。

参考文献

- 1) 西山徳明：序文，文化遺産マネジメントとツーリズムの現状と課題，国立民俗学博物館調査報告 51，pp.1-6，2004
- 2) 安福恵美子：ツーリズムと文化体験，pp.110-120，流通経済大学出版社，2006
- 3) 梅津ゆりえ，真坂昭夫：第二世代を迎えた日本型エコツーリズムの課題と展望に関する研究，文化遺産マネジメントとツーリズムの現状と課題，国立民俗学博物館調査報告51，p213，2004

(2016. 4. 11 受付)